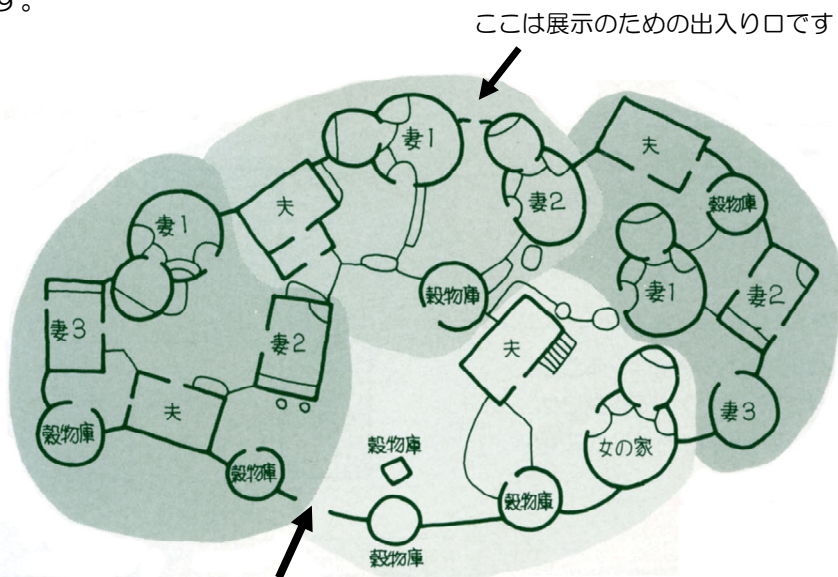


西アフリカ カッセーナの家

西アフリカの国ブルキナファソのカッセーナの人びとは、サハラ砂漠^{さばく}の南に広がるサバンナ地帯で、モロコシやトウジンビエ等の雑穀^{ざっこく}を栽培^{さいばい}する焼畑^{やきはた}農耕^{のうこうみん}民です。一夫多妻制度のもと、同じ屋敷^{いっふたさいせいど}地に血縁^{やしきち}関係^{けつえん}にある男たちとその複数の妻^{つま}と子供^こたちが暮^くらします。四角い家には男性、ヒョウタン型や丸型の家には（四角い家にも）女性や子供が住みます。壁の幾何学模様を描くのは女性の仕事で、女性たちが好みで模様を決めて描きます。



こちらが本来の出入り口です。

本来の出入り口は西か南で、東は悪い力の来る方向とされる。

複数の複婚(一夫多妻制)家族が集住
4人の男とその9人の妻の4世帯

【砦^{とりで}のような屋敷^{やしき}】

建物を土塀^{どべい}でつないで囲^{かこ}んでいるのが特徴^{とくちょう}です。この地域はかつて近隣の民族間の争いが激しく、敵の侵入^{きんりん}を妨^{みんぞくかん}げるために、家屋を土壁^{はげ}でつなぎ、屋敷全体を砦^{とりで}のようにしました。平らな屋根は農作物の干し場^ほであるとともに、敵を見張り迎え撃^{みは}つ所^{むか}でもありました。

カッセーナ人の“ヒョウタン文化”

【ヒョウタンの使い道はたくさん】

ヒョウタンはアフリカ起源^{きげん}の植物と考えられています。カッセーナ人が住む西アフリカのサバンナ地帯では、野生のもの^{さいばい}、栽培されたものなど、形も大きさも色々なものがあります。ヒョウタンは軽く、液体や細かい粉を入れることができ、殻^{から}が固く空気を通さないという性質^{せいしつ}があります。人々はこの性質を最大限に利用してさまざまな使い方をしてしています。飲み物、食べ物を入れる食器、おたまやひしゃく、ボウル等の調理器具^{ちようり きぐ}として、収穫^{しゆかく}した穀物^{よく}を選び分ける道具、大きなものは洗濯^{せんたく}たらいや赤ん坊の行水^{ぎようすい}用に、小さなものは小物入れや畑仕事用の種入れ容器に、他には太鼓^{どう}の胴^{もつ}や木琴^{きん}の共鳴器^{きようめいき}などにも利用されます。

【女性とヒョウタン】

カッセーナの主婦は、ザノと呼ばれるヒョウタンのモニュメントを持っています（右図 参照^{さんしやう}）。油できれいに磨き上げられた球形または半球形のヒョウタンをいくつも重ねた物を自分の家の中央に吊^つるして飾^{かざ}ります。いちばん底のヒョウタンの器には、カリテ・バター（アカテツ科^{やせいしゆ}の野生樹^{ゆし}の実から取る油脂、英語ではシア・バター）が入っています。カリテ・バターは調理^{なんこう}、軟膏^{せっけん}、石鹸、美容クリームなどに使います。使い続けていくうちにひびが入ってしまったヒョウタンを縫い合わせるのは女性の役割です。少し割れてしまったくらいで捨てることはなく、大事に直して使います。女性の生活とヒョウタンは深く^{かか}関わり合っているのです。

【サバンナのエコな暮らし】

ヒョウタンは道具に加工しやすいように生育途中^{せいいくとちゆう}で人の手が加えられます。収穫した後に形や大きさに合わせて加工され、修理をしながら大事に使い切った後、ヒョウタンはサバンナの土に還^{かえ}っていきます。このようにヒョウタン製の道具はとてもエコであるとも言えます。サバンナに住む人々は、自然の素材^{さいだいげん}を最大限に活用して暮らしているのです。

